

先生の教育(Teacher Education)を充実させることが日本の教育改革では最重要  
ーフィンランドの先生教育に学ぶー

開倫塾

塾長 林 明夫

1. おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。
2. 先週の土曜日・6月9日にフィンランド大使ご夫妻が足利市にお見えになり、足利学校とココファームワイナリー、鏝阿寺(ばんなじ)と一緒に散策させていただきました。
3. フィンランドは教育が非常に盛んで、PISA 調査、OECD(経済協力開発機構)が3年ごとに行う15歳時の青少年の学力調査では、フィンランドが常に1番、2番、3番と非常に高い順位を占めています。私もフィンランドに非常に関心があって何回かフィンランドに行かせていただき、フィンランドの教育はなぜレベルが高いのか・どのような特色があるのか・日本との違いは何かということ勉強してきました。今回、フィンランド大使を足利市にお招きして何時間か議論をしましたので、今日はフィンランドの教育についてのお話をさせていただきます。
4. フィンランドの教育の最大の特色は、学校の先生が自分の教える教科を専門に教えることです。日本の場合は、学校の先生方は英語・数学・理科・社会・国語・美術・音楽・保健体育など色々な教科を教え、そのほかに教科外の教育、遠足や部活動、生徒指導、学級会活動、生徒会活動、当番、PTA活動などの様々な学校行事や生徒の教科外の指導に非常に多くの時間と精力を費やしています。ですから、日本の学校の先生方の労働時間は、世界でも長い方で年間1900時間以上であるといわれています。その反面、フィンランドは日本とは異なり、学校の先生の仕事の大半は教科を教えることで、小学生であれば授業時間に教えることとされています。小学校の先生は1年生～4年生までがクラスルーム・ティーチャーというクラス担当の先生で、クラスで時間内の授業を一所懸命教えて、それ以外のことはあまりしません。小学校6年生から高校3年生までは教科の先生(サブジェクト・ティーチャー)といえます。この教科の先生は自分の教える教科の時間は非常に熱心に教えますが、教科外の教育はさほどしない、ほとんどしないということです。日本の場合には教科の指導をすると同時に、教科外の指導もたくさんします。ですから、日本とフィンランドの教育には先生の活動の面で非常に差があります。

5. 日本の教育は全人教育、全人格教育であると私は考えます。全人教育、つまり家庭で教えていただくような家庭教育のことまでを含めて、例えば、箸の持ち方やえんぴつの持ち方、お辞儀の仕方、靴を揃えるなどを事細かに教えるのが日本の教育です。また、運動会や修学旅行などの学校行事も非常に盛んです。ここで集団行動や躰教育がなされます。このように、日本は全人格的な教育を非常に熱心に行います。反面、日本の先生方は、フィンランドの先生方と比べて各教科の準備をそれほどしない、また、準備をする時間があまりないといわれています。フィンランドの先生方と比べると、教科について準備する時間はもしかしたら 10 分の 1 ぐらいしかないと感じます。フィンランド先生方は教科外の指導をほとんどしませんので、その分教科の準備をたくさんします。例えば、教科書は自分で選ぶ、教材は自分で作る、テストも自分で作る、一年間の授業の全体像を示すシラバスも自分で書き、毎日の授業をどのようにするか設計も授業ごとにかなり細かく立ててその授業に全力を傾ける。学力が足りない生徒につきましては、授業時間以外にも教える。日本の場合には 1 つの授業に複数の先生が入る場合はあまりありませんが、フィンランドの場合は、元々クラスの人数が 20 名ぐらいと少ないのですが、例えば算数・数学の授業であれば先生は 1 人だけではなく、2 人、3 人入ります。私がフィンランドの中学校で見た光景は、主な先生が 1 人、学校ボランティアの先生が 1 人、大学院の学生で教育実習をする方が 1 人いて、3 名の先生が 20 名のクラスを教えていました。このような形でボランティアや教育関係の学生さんなど複数の先生が入ることがフィンランドでよく行われています。日本とは非常に様子が違うことがわかりました。

6. また、先生の教育(教師教育 **Teacher Education**)については、フィンランドの場合は大学は 3 年間です。学校の先生になりたい方は教員養成学部に行きます。その学部に入るのにとっても難しい試験があり、先生としての適性或学力などを 1 週間ぐらいかけて試験をします。日本の場合はペーパー試験だけで教員養成学部に入学できますが、フィンランドでは先生になるための教育を受けることはとても難しいとされています。教育関係の学部で 3 年間勉強をして、さらに、2 年間の大学院の修士課程を修了した人でなければ、たとえ小学校でも学校の先生になることはできません。もちろん、中学校や高等学校の先生はすべて修士課程の資格を持っています。小学生を教える先生も修士課程の資格を持っています。反面、日本の学校の先生方は、大学院の修士課程を終えている方は高校の先生でも 10% ぐらいしかいません。ですから、先生としての学歴・学力は、もしかしたらフィンランドの先生方のほうが日本よりも遙かに高いかもしれません。大学院を出たから学力が高いかどうかについてもまた議論はあるかもしれませんが、学歴はフィンランドの先生方のほうが高いです。これはフィンランドだけではありません。学校の先生になるには、大学で 4 年間勉強したほかに大学院の修士課程で最低 2 年間勉強することが、世界の潮流です。日本では少しずつはあるかもしれませんが、まだまだその動きはありません。これが日本とフィンランドの違い、そして世界との違いです。今、先生の質が問われています。一番よいことは、今いる先生方も 10 年～ 15 年以内ぐらいに大学院の修士課程をすべてを修了することです。これが学力面で世界のトップレベルの教育に追いつく一番の方法かなと私は思います。皆さんはどのようにお考えでしょうか。

— 2012 年 12 月 26 日校正 林明夫 —